

観音寺城跡を歩く - 2022/4/11

大手道ルートから、後藤賢豊の足跡を探る。

観音寺城の縄張

村田 修 三 (奈良女子大学助教授)

観音寺城は、山上から山腹にかけて密集する郭群が城下町石寺の屋敷群と連続している点に一つの特徴をもっているが、標高 200m から 250m あたりは郭の分布の密度が小さいので、山上・山腹部分だけをとりあげて一つのまとまった城郭として考察することが許されると思う。この部分の郭や城道の配列、すなわち縄張で最も注目される点は、段状の諸郭が碁盤目状に行儀よく並んでいる箇所が多いことである。碁盤目状地割の一番顕著に認められるのは、観音正寺の直下に展開する後藤・進藤地区である。ここは並行する段状の諸郭が上下行する 3 本の石段道によってつなぎあわせられ、今日のヒナ段式分譲宅地そっくりの形になっている。ここほど見事ではないが、上下行する道を軸にして珠数つなぎになった段状の郭の列が、關迦坂巡礼道の東側の山腹に 5 本、観音正寺より標高の高いところに 2 本ある。そしてこれら各列の郭から隣の列の郭へ横につなげて渡り歩くことのできる場所がたくさんあるので、縦の列は互いに横に連結し合っていたはずで、郭群全体は縦横十文字に結ばれる碁盤目状地割に配列されることになる。

もう一つの特徴は、本丸・平井・落合・池田の諸郭は稜線上に並んでいるが、本丸より高い部分の稜線上には、三国丸を除けば、どこにも郭が設けられず、かわりに石塁もしくは土塁の道が走っていることである。中世の山城の典型的な縄張は、山頂の郭を中心にして、それに続く稜線上に郭が連続する形になっている。谷に落ちる山腹斜面には郭があっても副次的な小郭か細い帯郭であるのが、一般である。ところが観音寺城では、西端の本丸以下の部分と東端の淡路丸を除けば、全く逆に、山腹斜面に郭があって、山頂・稜線上に郭がない。稜線上の道は、大陸の城塞都市の城壁のように、山腹諸郭を上から囲い込んでいる。

すでに多くの人々が認めているように、この城の郭は殆んどが石垣で固められている。中世の山城で石垣はごく限られた要所にしか用いられていないのに、全面的な石垣使用は比類がない。この城の石垣には新旧の時代差が認められるということだが、大半は同じ形式に属するとみてよい。おそらく穴太の石工の技術が採用された戦国最末期の産物ではあるまいか。前述した縄張の特徴とこの石垣の評価を合わせて考えてみるとどうなるか。結論は、戦国最末期に、ほぼ全域が、統一的なプランのもとに、築造されたということにな

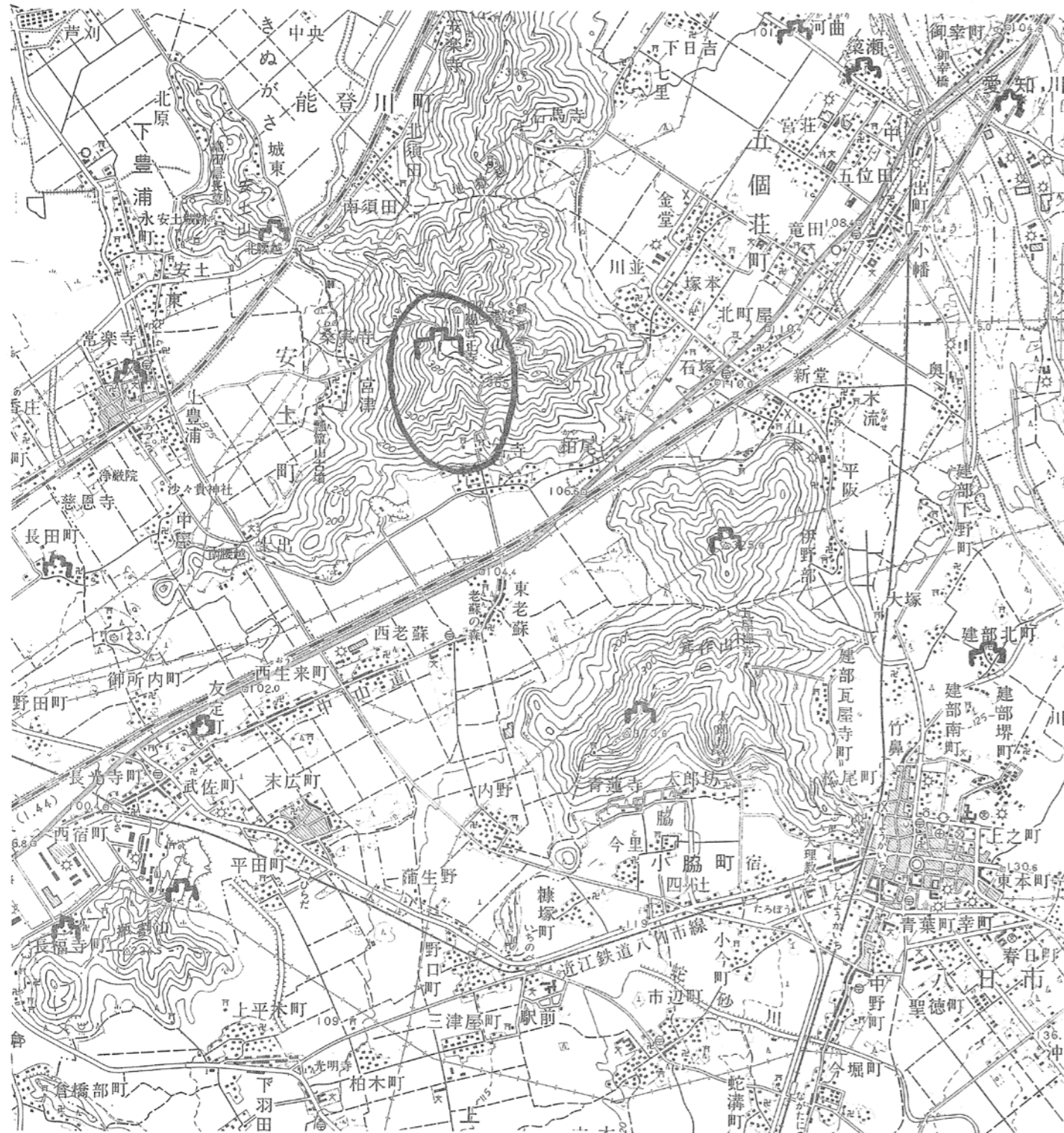
る。これをなしとげたのは、高度の土木技術（田中政三氏が力説される暗渠排水路等を見よ）と大量の労働力を支配しえた強大な権力でなければならない。

観音寺山には南北朝内乱期に小規模な郭が築かれたと思われるし、応仁の乱中に佐々木六角氏がここに本城を移してかなり大規模な築城を行ったことは否めない。しかし山頂の十方峯にはついで郭築造の行われた形跡はないから、戦国最末期に至るまでは、六角氏の城郭は本丸～池田地区を中心とする規模のものであったと思われる。池田から直降する尾根が山下の本屋形に連絡して追手（大手）道とか表坂道とよばれていることは、この推測と合致する。しばらくの間、山上の詰の城と山下の館を大手道で結ぶという中世城郭の基本形にのっとなって、山上の郭増設、山下の城下町建設を発達させていた観音寺城が、突如質的に大転換して、旧城域のたてなおしと同時に、稜線で囲まれる全山に、統一規格・石垣全面使用の大城郭建設にふみきったことになる。

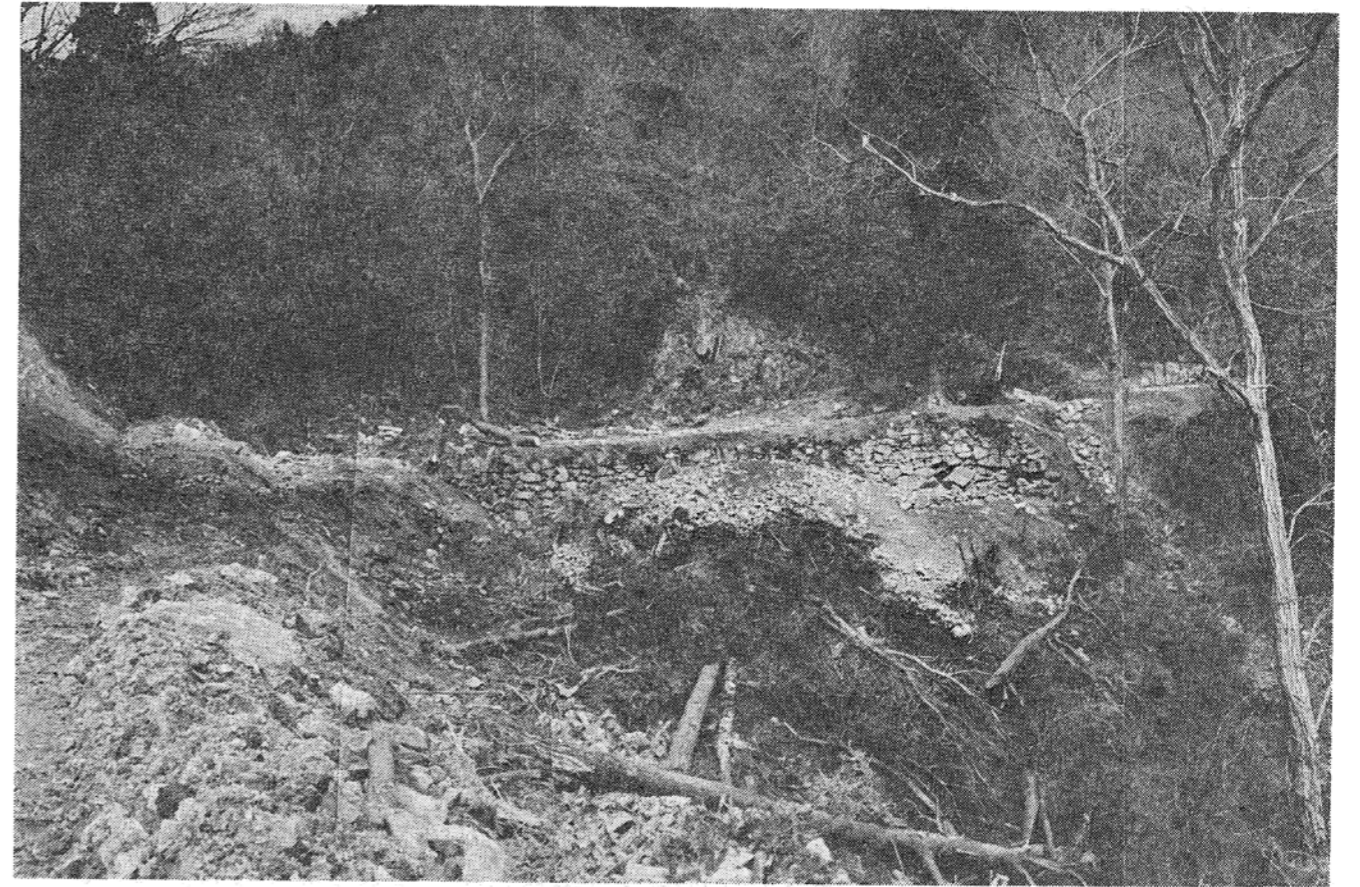
これもすでに指摘されていることだが、この城の多くの郭に庭園遺構が残り、六角氏の重臣の屋敷名が伝わることから傍証される如く、諸郭は家臣団の居住する屋敷地であったことは否定できない。縄張の面からも諸郭の機能が戦闘用よりも居住用に適している。だとすると、築城の大転換をもたらしたのは、家臣団集住政策の強化である。大世帯の家臣団を大名の膝下に集住させるために、規格型の地割で郭を大量生産し、家臣グループごとに分配した。やはり分譲宅地だったのである。それも山麓の城下地区よりも急峻な山内に主として造成したのは、城下地区が満員になったからというのではなく、軍事的な危機がたかまっていた時期だったからである。また、石垣で固めたのは、そうしなければ急斜面がもたないという土木技術的な理由だけでなく、鉄砲が大量に使用される段階になったという軍事技術的な理由があったにちがいない。鉄砲が実戦に用いられた最初は天文19年（1548）、六角定頼に支えられた細川晴元が大文字山から三好長慶を攻めた時で、この頃六角氏が鉄砲を持っていたことはたしかだ。鉄砲が兵法を転換させるところまで大量に用いられ出したのは永禄年間（1558～69）である。六角氏が家臣団集住の強化など体制たてなおしをはかった時期はいつか。気になるのは永禄6年の観音寺騒動である。六角定頼の子義治が重臣の後藤賢豊父子を暗殺したのに反撥した家臣が反乱し、浅井氏の進出を許して大混乱、観音寺城と城下石寺を焼いた事件だが、永禄9年には浅井勢に敗れ、翌10年には重臣に迫られた形で六角式目を制定している。11年には信長に押えられるので、従来はこの期間を六角氏没落の過程として理解されがちだったが、危機だからこそ重臣層が六角氏の権威の下に結束して体制たてなおしをはかったとも考えられる。城郭遺跡の語る内容から推定すると、どうも観音寺騒動後の短期間に権力構造上の変化＝観音寺城の変質がおこったように思われる。

観音寺城とその周辺

凸は現存する中世の山城・居館跡（安土城はのぞく）

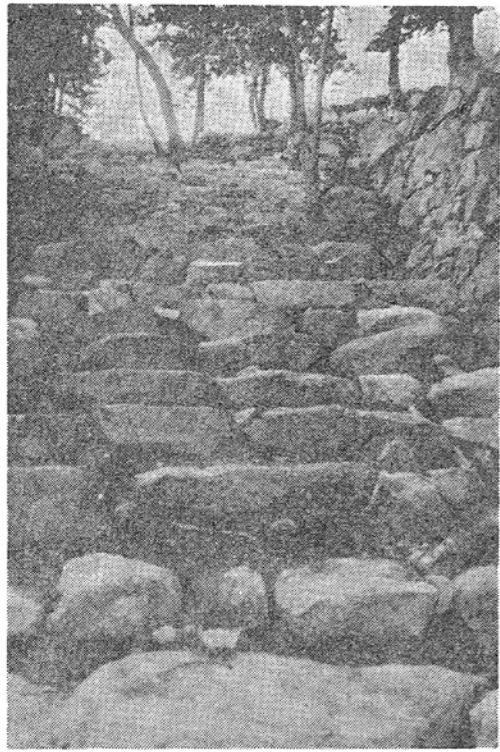


「この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図（近江八幡）を使用したものである。」

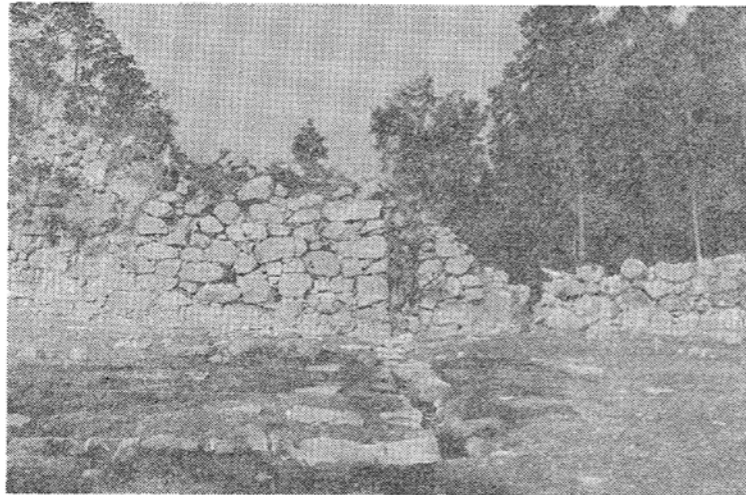


林道工事と観音寺城本谷筋の郭（1978年2月下旬）

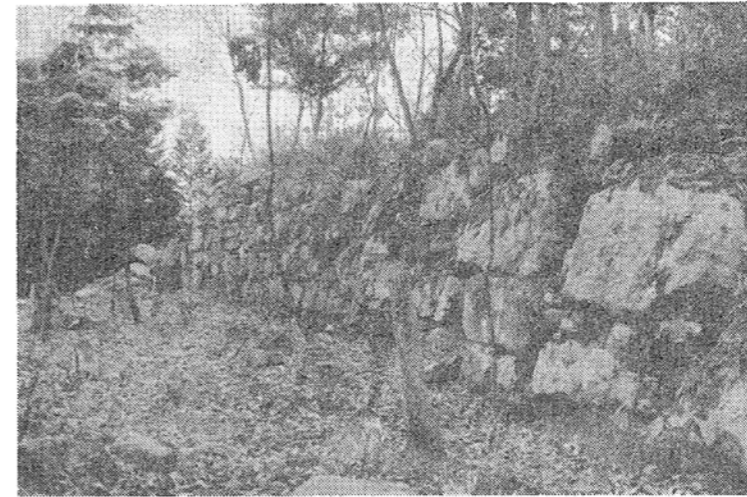
写真左側の道が工事途中の林道、郭の上をって写真右方に林道がのびる。道路工事と郭の事前調査の結果、本谷道が伐採された樹木と土石によってうずもれている



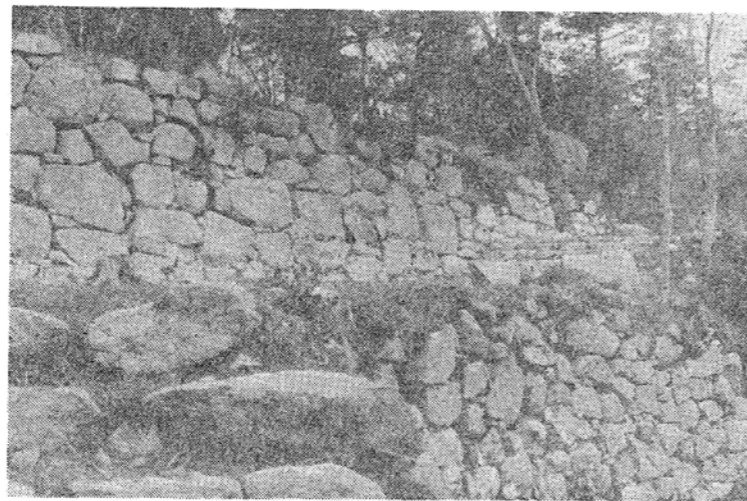
本丸大手階段



本丸の石塁、手前の平場が本丸



山頂線南堀切の石塁

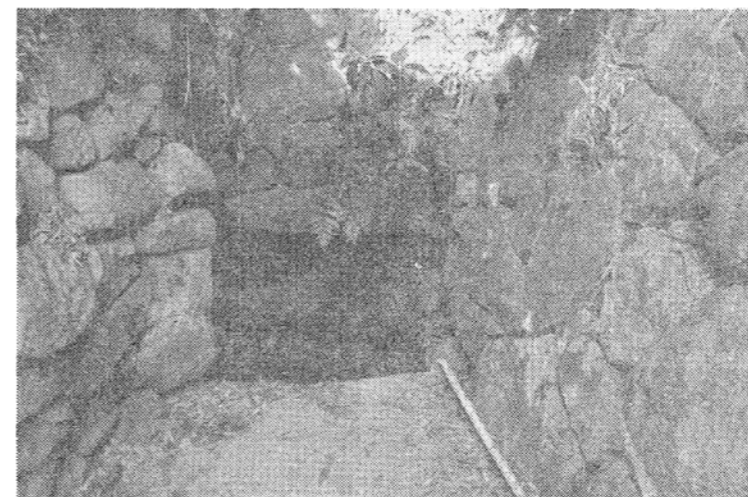


平井・落合の石塁

後藤地区の碁盤目状地割石垣



池田丸礎石の配列、前方中央の建物
の中に貯水槽がある



七っ井戸の一つ

史跡観音寺城の破壊を惜しむ

真山保雄 (八幡工業高校教諭)

近江の湖東平野の真中に、どっかりと腰をおろした様な形の織山を私達は何時も観音寺山と呼び眺めています。親しみのある丸い山の形と山頂にある西国の礼所である観音寺への信仰とが、近在の人々の心を暖かく包んでくれる感じの山です。

この山に鎌倉時代の昔から、凡そ400年の長い間近江の国を支配していた守護職の近江源氏佐々木氏が居城を築いておりました。それが観音寺城です。

しかし、私達地元の者にとって、この山は史跡観音寺城よりも霊域観音正寺へ参拝と云う方が強く印象づけられていました。

ところが、この観音寺山に昭和49年頃に神崎郡五箇荘町川並の方面から、昭和51年の8月には蒲生郡安土町石寺から山の中腹を蛇が横たわっているように、その山肌をえぐり取り道路を造る工事が始まりました。

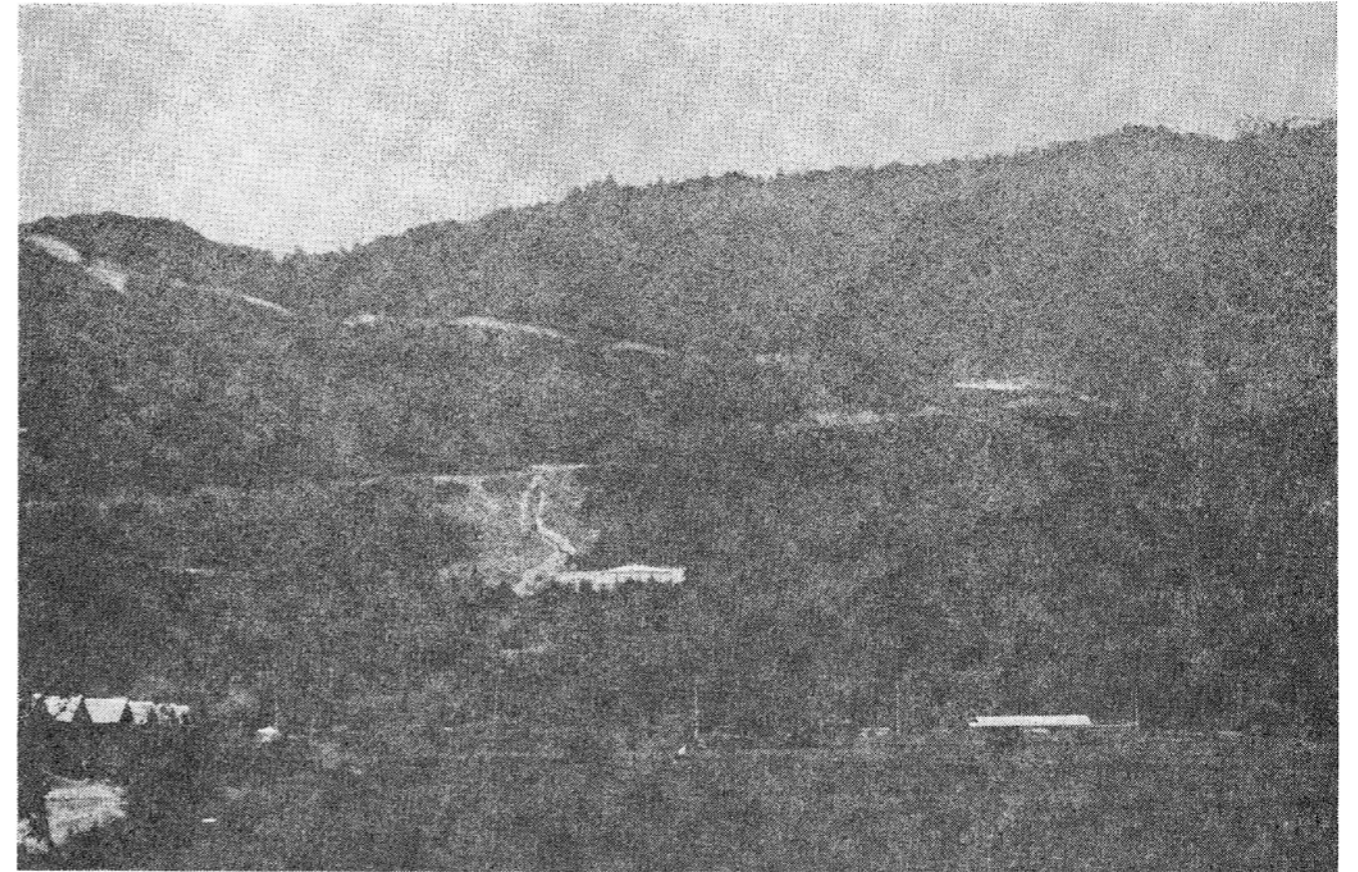
誰が何のためにつける道路か、何故こんな美しい山を破壊し傷をつけなければならないのか!! と誰しもがこの様な素朴な疑問と怒りを持たざるを得ませんでした。私達地元の住民にとって、この身近な近江源氏佐々木氏とその居城である観音寺城の歴史については、織田信長やその安土城と比較して意外に知られておらず多くのナゾを包んでいました。

ただ、歴史の通説としては「永禄11年9月織田信長によって攻め滅ぼされ落城し城の石垣等は壊され、後に安土城築城の際に使った」と述べています。

ところがその壊されたはずの城壁の石垣が当時のまゝの姿で全く無傷のまゝ土中に埋もれていたのです。昭和44年・45年の両年度に滋賀県教育委員会が行った発掘調査(調査主任は観音寺城を守る会の会長田中政三氏)で、その立派な城壁・石段・礎石側溝などの多くの遺構が、除かれた土の下から出現したのです。実に不思議な遺構の出現だったので、この新たな城壁・石垣等の出現によって、私達でさえ深い疑問と観音寺城の歴史の調査研究を根本的にやり直さなければならない事を知らされました。

「史書は誤っている」と歴史家も知らされたのです。観音寺城の発掘調査の結果から推定すれば、その城郭の規模は、我国随一の山岳城と確認され、この史跡は国家的文化財であると評価されました。そして今後も引続き調査と保存、特に文化財の指定を急務としている現況は万人が認める所であります。

この様な時にこの大切な近江の文化財観音寺城の遺構を破壊して、道路を造る必要があ



川並口林道遠景 道路工事の結果、山の土が次々に流れ落ち、山肌も無惨なありさまを呈している

るのでしょうか? 私達には全く不可解な工事でありました。

歴史学者や関係諸機関、また新聞やテレビの報道機関がこぞって現況の報告や保護を強く県民に訴えています。石壁・礎石・石段や側溝の暗渠による排水路・井戸水の取入口等の技術の考案工夫は、公害に悩む現代の社会にも、大いに学ぶべき私達の祖先の文化遺産であります。この立派な郷土の文化財を私達地元は言うまでもなく、広く滋賀県及び国もが、あらゆる努力を惜しまず破壊から守り保護する事を念じています。

つわものの栄枯の史を究ぬままに、壊せし跡や心痛む

観音寺城案内

村田 修 三 (奈良女子大学助教授)

観音寺城の全域を見学するのは何日かけても常人ではまず不可能としても、とりあえず主な郭を見て歩くのに便利なコースをいくつか提示してみよう。その前にこの城の地区分けを試みてみる。

①本丸・池田地区——先年発掘調査された主郭部分。通称三の丸（あえて呼ぶなら二の丸がふさわしい）は未発掘だが、本丸と大石段で、平井丸虎口と等高の道で緊密に結ばれており、この地区に含まれる。

②三国・三井地区——山頂（十方嶺）を扇の要にして南方にひろがる段状郭群で、西は本丸の際まで、東は「佐々木城址」碑や奥ノ院のある岩場まで、南は観音正寺の線まで。

③伊庭・淡路地区——②の東に続く部分。吹越峠（お茶子地藏）の鞍部で東西に2分される。

本城は宮津口見付——通称三の丸——観音正寺（上御用屋敷）——権現見付——吹越峠をつなぐほぼ等高の東西幹線道路で上下に2分されている。①②③はこの線より上にあって、山上部と総称できる。

④西山腹地区——進藤・後藤丸周辺のいわゆる碁盤目状地割の顕著な箇所を中心とし、西は追手道（表坂道）、東は関迦坂巡礼道で境される。本谷に向かって急傾斜している。

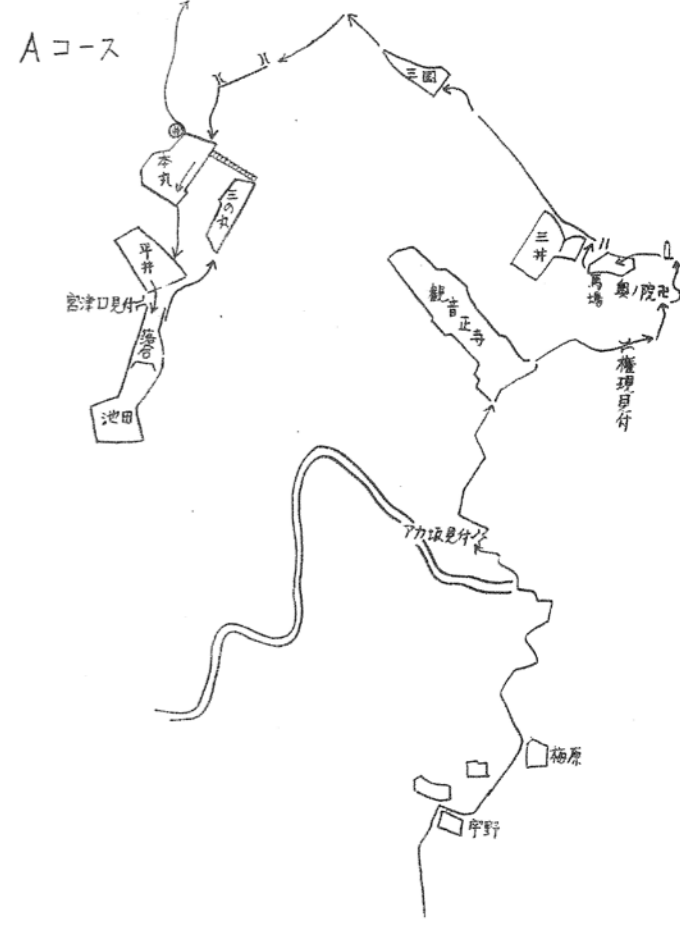
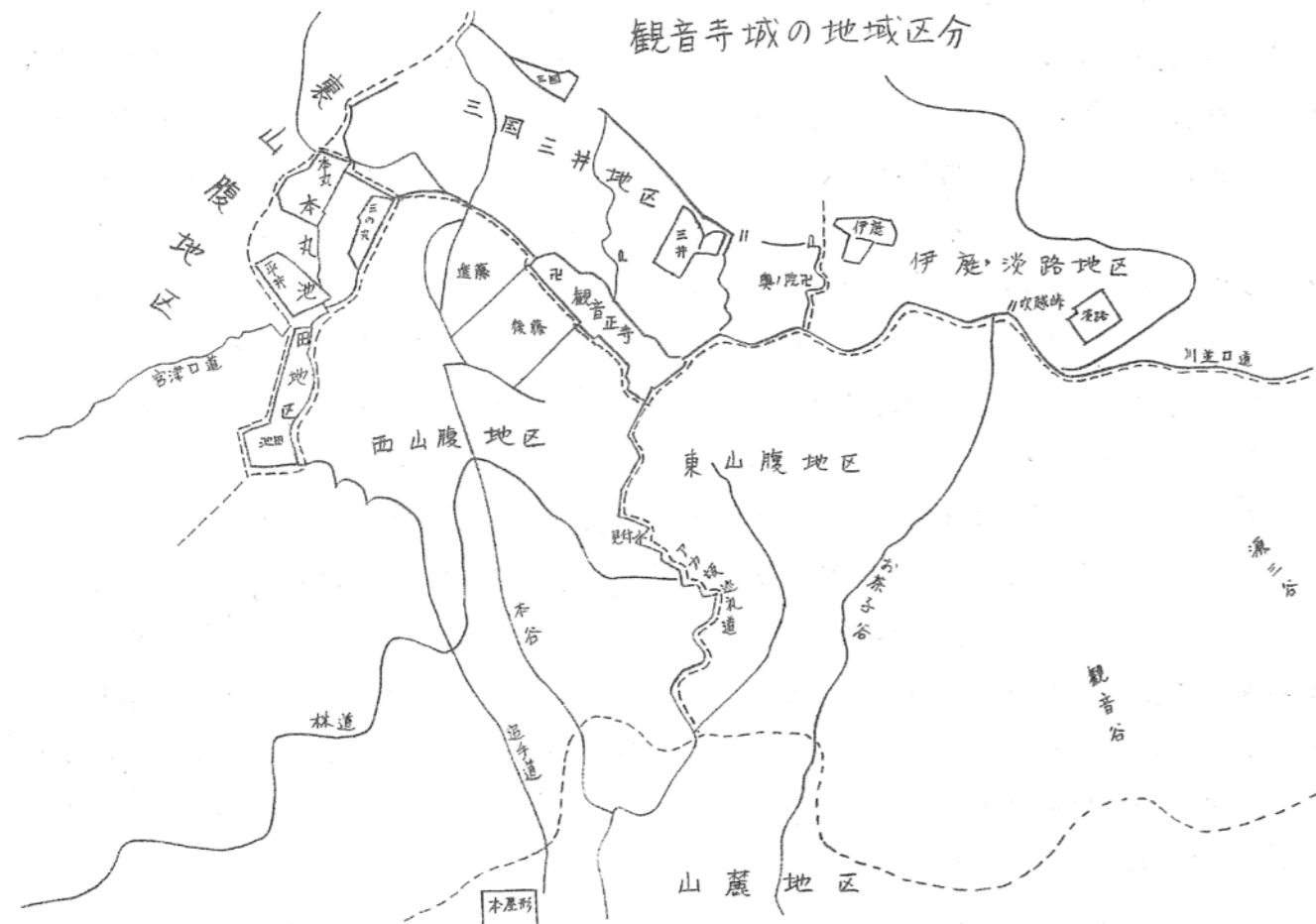
⑤東山腹地区——お茶子谷に向かって傾斜する地区。郭を珠数つなぎにする上下道が5本走り、西の2本は関迦坂道へ、東の3本はお茶子谷道へ合する。さらに東の観音谷・源三谷の筋は未確認（地形的にみてこの2筋の山腹部分に郭はないもよう）。

⑥裏山腹地区——①及び②の西面より下の部分。宮津口見付・平井丸裏虎口・本丸裏太夫井戸、桑実寺下山口、裏見付等から下る筋に沿って郭群があるが、小規模で確認の遅れた地区。

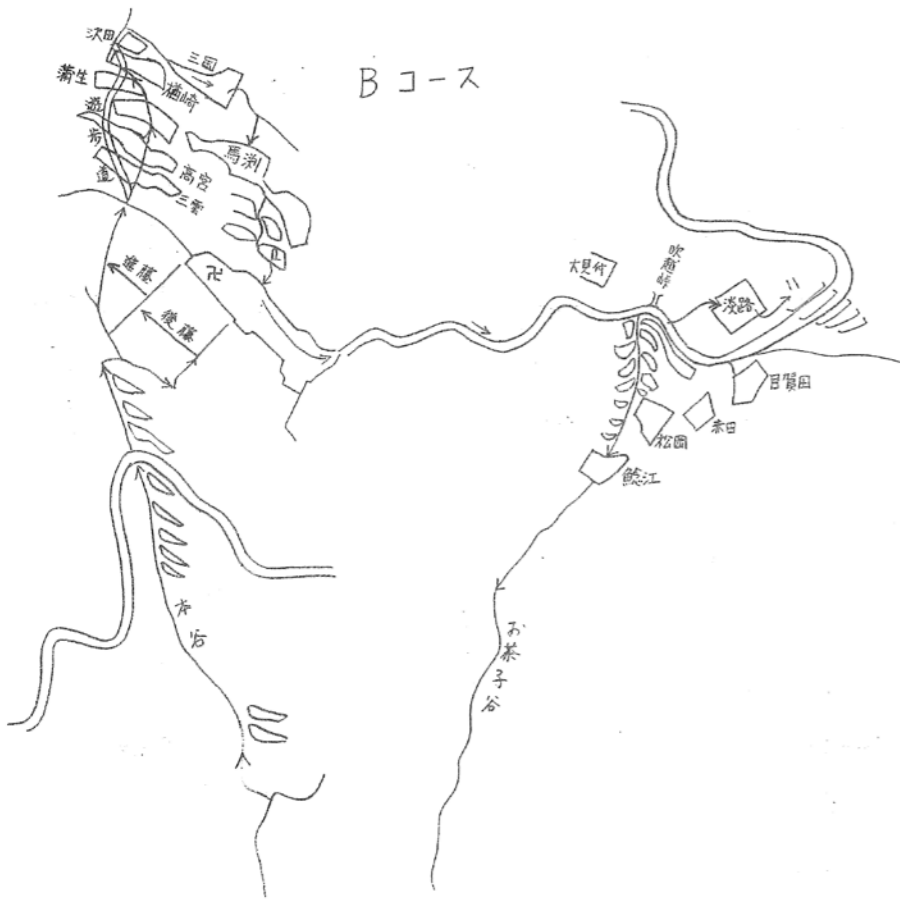
⑦山麓番区——織山南麓のほぼ全域に屋敷跡が連続する。さらに西側山麓の大字桑実寺、宮津の山麓道路より上方にも屋敷跡が群在し、桑実寺山門（正覚院跡）附近では寺院跡と重複している。

以上の7地区をうまくつないで見て歩くことが必要だが、重点的に次の5コースに分けてみる。

(A)①②地区と地形の概要をつかむメインコース。石寺から関迦坂巡礼道を登る。本谷から離れて急な石段になったあたりで、宇野から梅原に至る山麓部最上部の郭に出合う。梅原から比高50m程は郭がとぎれるが、やがて道の右下に⑤地区の郭が見えてくる。間もなく林道（ドラブウェイ）終着点につく。巡礼道を越えて東へ郭をつないで赤い測量杭が無気味に続いている。すぐ上が関迦坂見付。ここから上は左に④地区の郭が何段か口を開いている。観音正寺で一服して東へ。元は東西幹線城道だった川並口巡礼道だが、拡幅されてドライブウェイになっている。削土を下の⑤地区諸郭に落とし込んでいる惨状を見ながら権現見付の城門跡を過ぎる頃、左上に石垣が見える。細い石段を小郭をぬって登ると奥ノ院。岩窟内に線刻の石仏がある。いったん下の小郭に下りて又上ると岩場の上に出る。「佐



々木城址」碑から西へ土塁が突き出し空堀で切断されている。その南下の馬場丸から西隣の三井丸へ入る。三井を囲む石塁が稜線上の土塁道となって延々と三国丸へ続く。三国丸がこの稜線上で唯一の平場となっており、その東北尾根に土塁が枝分れしている。十方嶺の三叉路には郭がなく、直下にアンテナの立つ沢田丸がある。南斜面の郭群を防塁で囲む構えになっており、この城が山上城郭都市とも評される所以がよくわかる。沢田丸の下の檜崎丸に下りて、そこから下へ石段道が段状諸郭を梯郭式につないでいる様子を確認。西側稜線にもどり、裏見付へ下りる。この間比高差15mほど墨線がとぎれるが、裏見付から西南に向って、本城中で最も規格性に富んだ石塁道を歩き薬師口見付から南へ折れる。本丸へ下りるまでの半分ほど防塁が続く。本丸から平井丸へ直降。平井丸北寄りの庭園跡をまわって南面石塁へもどる。石塁の東寄りに埋み門が、西寄りに巨大な虎口石積がある。本城中で最も新しい技術による築城部分である。宮津口見付から⑥地区をのぞき下ろしたら落合へ。ここは他の郭と性格が異り、櫓跡らしい高台と煙硝蔵跡と推定されている低地とからなっている。池田丸に下って西南にのびる尾根筋に空堀を確認したら再び平井丸虎口へもどり、東方、通称三の丸を経て大石段を本丸へもどる。石段東隅の側溝が暗渠になっていて、本丸の排水処理の巧みさがうかがえる。本丸から池田まで、西・南側（裏側）にがん丈な石塁が築かれ、東側（表側）にはそれを欠いていること、つまり①②両地区通じて石塁・土塁を背にして石寺側へ開かれた構えになっている。平井丸だけは石寺側に石

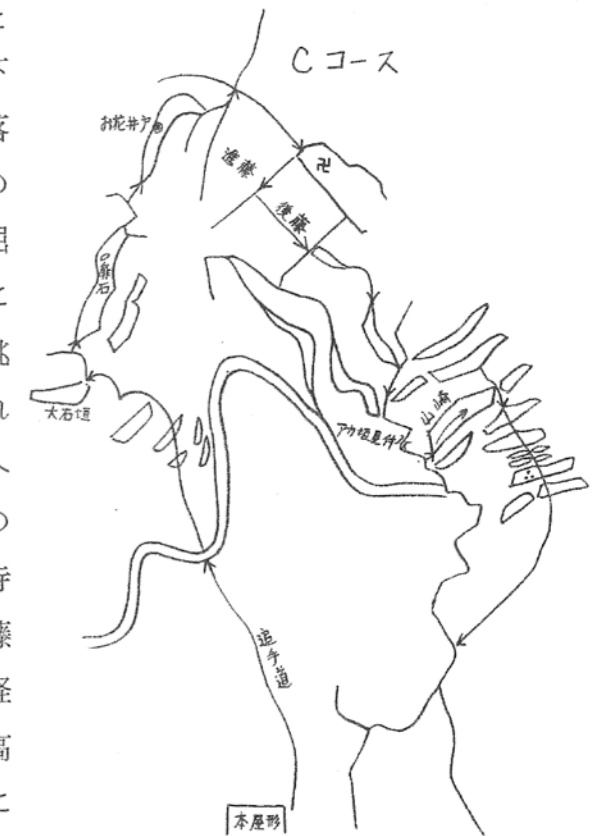


塁とがん丈な虎口があるのは、裏側・宮津口見付からの入口になっているからで、石寺側に向いた縄張の上に、宮津側に向いた縄張が重なっていることがわかる。本丸の裏虎口から太夫井戸に下りる。ここは一度も水がかれなかったのに林道工事の後水がかれた。虎口にもどってから桑実寺下山道へ。途中数段の郭が続く。桑実寺から石段を下りる。山門脇に將軍義晴の亡命していた正覚院跡があり最近伐開されて上方に10段の寺院跡が重なる。このあ

たりは城郭としても評価されている。

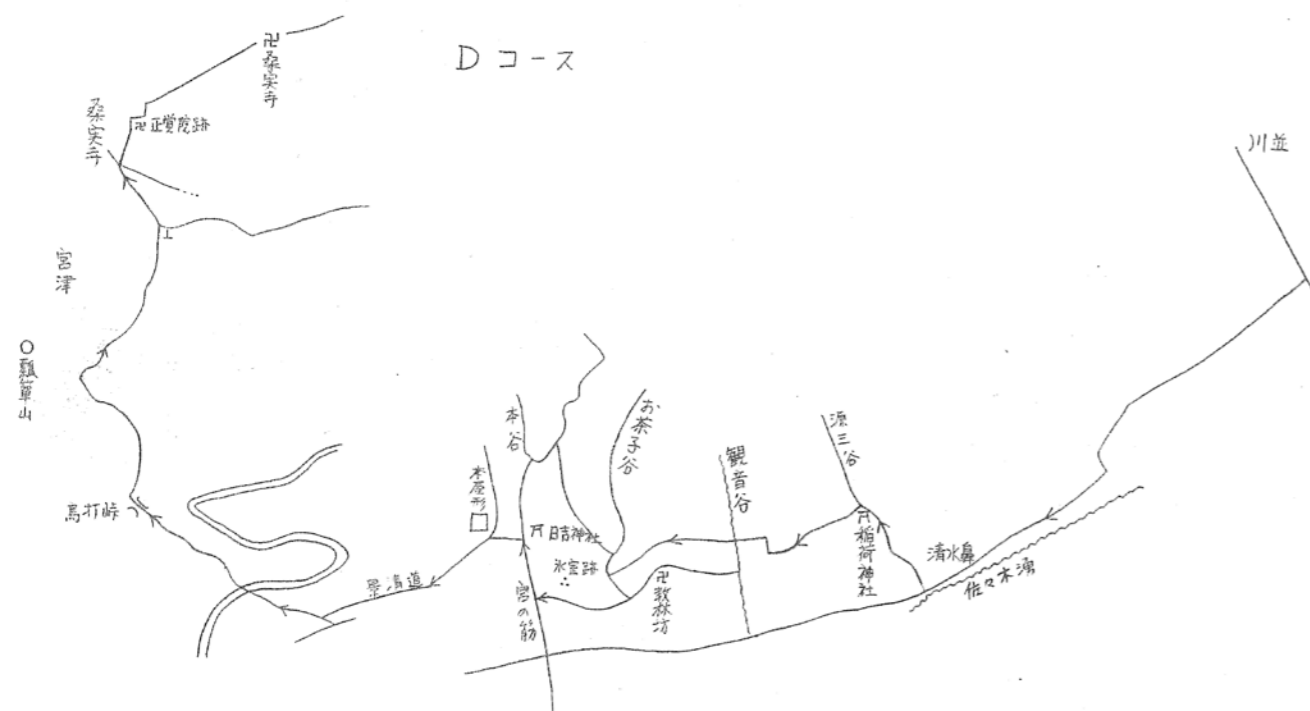
(B)本谷から登ってお茶子谷を下りる谷コース。関迦坂巡礼道と分れてしばらく東側に郭跡が重なるが、やがてとぎれ、④地区へ入る。西側を見上げると林道の削土崩落が見えてくる。東側に再び細い郭の段があらわれ、5段目をつぶして林道が本谷を渡る。林道を越えてまだ3段ほど郭が続く、小さな滝につき当ると道は東へ山腹を迂回する。2条の帯郭を経て後藤丸へ直登する石段道に出る。西北にもう2筋石段道が平行して走り、碁盤目状の郭群を形成している。進藤丸を横切って石段道を登り、観音正寺から西進してきた道を横切ると②地区へ入る。新しくつけられた遊歩道は石段道をつぶして乱暴に曲っているので、これにまどわされずに石段をたしかめつつ直登する。三雲・高宮・和田・蒲生・檜崎と珠数つなぎにしている。山頂から三国丸に出て、三国から稜線をはなれて馬淵丸へ下り、2段下の「観音寺城址」碑から観音正寺へ。東西幹線を東進して淡路丸へ。ここは本城中最も形の整った方形郭で、四周を土塁が囲む。北隅に祭壇跡がある。東に続く尾根の小空堀から下へ。数段の帯郭が車道で破壊されている。川並巡礼道との分岐点から目賀田丸へ下りる。ここから赤田以下へは下りにくいので車道へもどり、吹越峠のやや西から南へ下りるとお茶子谷の石段道である。松岡丸虎口と出合うあたりが最もよく残っている。鯉江丸をすぎてまっすぐ下山。時間があれば教林坊をまわって石寺へ。

(C)追手道から登って山腹を横断するコース。本屋形の東の尾根を直登すると林道で断ち切られた箇所に出る。苦労してこれを越えると間もなく狭少な郭に出る。ここから本谷に少し下りると2段の郭があり、下段は林道の掘削で崩落しかかっている。尾根にもどり登るとなお2段の郭があり、その上から道は屈曲する。2度目の屈折点の西に郭があり、その虎口は女郎岩を巧みに利用して枡形状になっている。南側は大石垣で眺望がよい。ここから少し登ると右側に小道が分れ長大な郭に出る。東進して石段を少し登って右へ入るとお花井戸のある郭に着く。この郭は本谷の西寄り登路につながっている。いったん観音正寺裏口に至り現在位置をたしかめてから進藤・後藤地区へ下りる。ここから関迦坂巡礼道へ出る郭經由道は3本ある。わかりやすいのは後藤丸と同高の小郭を直進する道で、観音正寺の石垣が真上に見える。できれば他の道も試みて、山腹部の東西連絡の仕方を確認しておきたい。巡礼道に出て関



迦坂見付の直下に⑤地区最大の山崎丸を見る。ここは林道の駐車場用地にねらわれた郭である。山崎を横切ると郭群をつなぐ上下道に出る。3段ほど下ると、山腹部で最も立派な庭園跡があり、直立した庭石も残っている。さらに2・3段下ると笹原になって西へ迂回し、巡礼道にもどる。

(D)山麓屋敷跡コース。縦走するだけで3キロに及ぶ。石寺から入らず、能登川駅からバスで川並の端まで行き、山麓を清水鼻へ至るのもよい。箕作山との間の地峡へ突き出る尾根上に出城があるようだが未踏査。佐々木湧の西流するのを見てから源三谷を稲荷神社へ。この附近から西へ観音谷口・教林坊周辺・日吉神社周辺・本屋形下と、屋敷跡の石垣が密集して続く、稲荷神社から西へ大体等高につなぐ道があり、お茶子谷口から西はわかりにくい氷室跡を経ていったん宮の筋へ出て、本屋形へ登ってから追手道口へ斜めに下って景清道を西行する。水田に出てから山側へとりなおして林道を横切るとそのまま鳥打峠へ登る。峠から等高に300m行くと瓢箪山古墳に直降する尾根に出る。尾根を越えて250m程の三叉路からやや下りかげんになる。このあたりから屋敷跡が連続する。三叉路を東へ登ると墓場があり、宮津口の登り口である。おそらくここが西側の城下屋敷群の中心で、直降すると瓢箪山にかこまれたかつての入江の最奥部、宮津の舟着場であったろう。下りかげんの道を北進すると竹藪に入り、道が交叉している。ここから山へ登る道も宮津口道へ合するようだが、ひどいブッシュで入りにくい。この交叉点から又上り勾配になり正覚院下の石垣に出る。



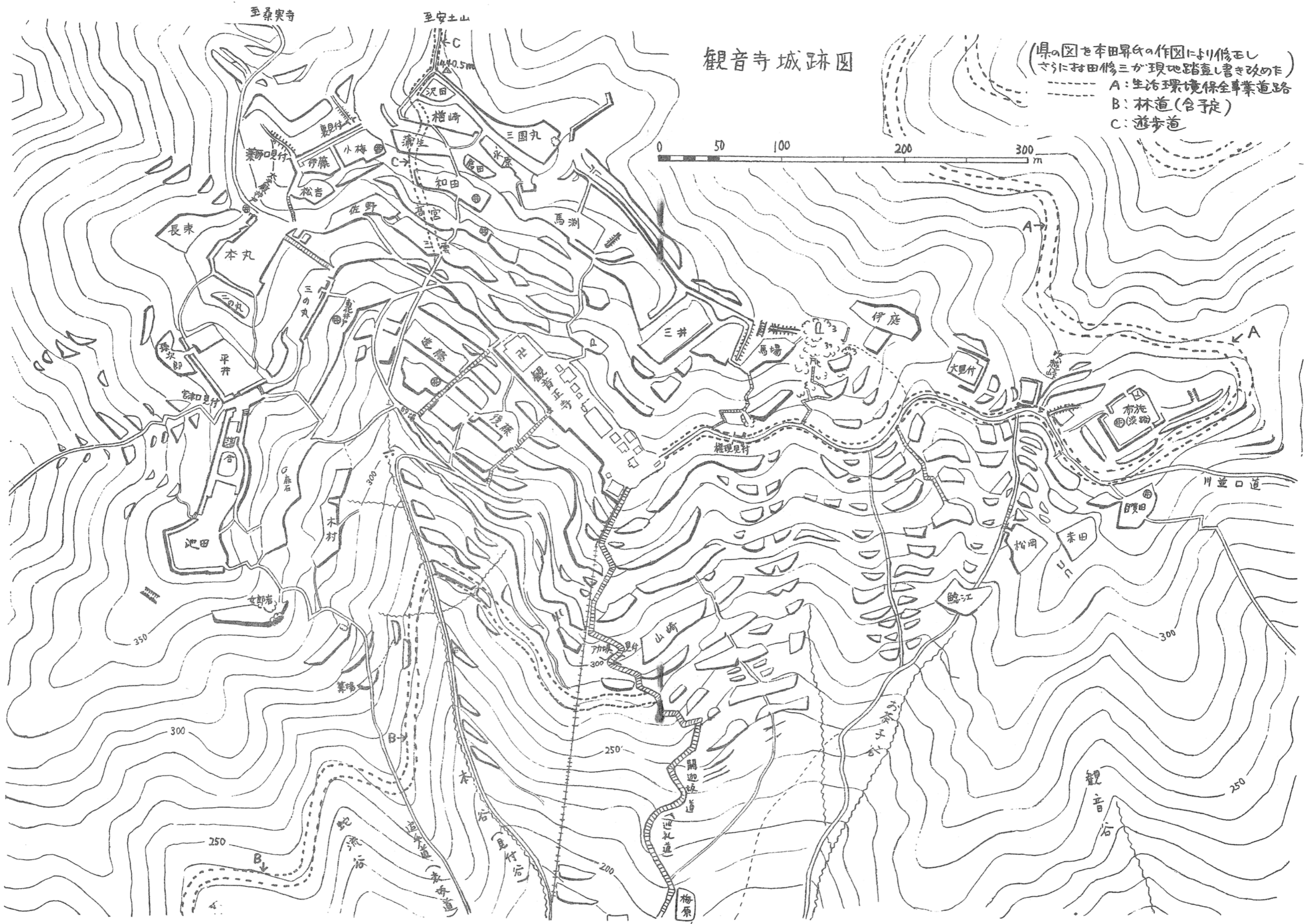
(E)川並から宮津への大縦走コース。川並山麓には、田中会長の調査で佐々木氏の墓所と推定される台場があるそうである。結神社境内から川並巡礼道を登る。尾根に上って間

もなく北側に小郭が数段続くが、とぎれて淡路丸下まで遺構は確認できない。観音正寺までの途中、前記のコースで見落した⑤地区への下り道を若干分け入ってみる。平井丸から宮津見付を下りる。石垣の崩れがひどいが小郭が続く。谷に下りきってから道がとぎれる。谷をはずれないようにすれば(D)で見た墓所にたどりつく。宮津口道をとらずに本丸裏の長東丸から直降すると大変な冒険だが、郭か寺院跡か定かでない数段を経て桑実寺に下着する。



観音寺城跡図

(県の図を本田昇氏の作図により修正し
またにお田修三が現地踏査し書き改めた)
----- A: 生活環境保全事業道路
----- B: 林道(合予定)
----- C: 遊歩道



史跡観音寺城跡平面図



- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. 本丸 | 13. 馬淵 |
| 2. 平井加賀守 | 14. 馬場 |
| 3. 池田伊予守 | 15. 権現見付 |
| 4. 女郎岩・大石垣 | 16. 奥ノ院 |
| 5. 扇石 | 17. 伊庭 |
| 6. お花井戸 | 18. 大見付 |
| 7. 進藤山城守 | 19. 布施淡路守 |
| 8. 後藤但馬守 | 20. 目賀田摂津守 |
| 9. 現観音正寺（上御用屋敷） | 21. 鯉江 |
| 10. 樽崎源左衛門 | 22. 関加坂見付 |
| 11. 三国岩・三国の間 | 23. 久保備前守（大門跡推定地） |
| 12. 永原 | |

曲輪の呼称は絵図等に用いられた俗称であるが参考のため番号を付して示した。

清水鼻